届け 世界の果てまでも

令和４年１１月２日　Ｎｏ．４３　文責　校長　飯久保一男

子どもを応援する

子どもがいちばん「のびる」ときはどんなときでしょう。その答えの一つは，
子どもがいちばんやりたいことをやっているとき，好きなことに熱中しているときです。

５年生の女の子のＲさんはおとなしい子で，友だち付き合いは苦手にしていました。授業中に発言することはほとんどありませんでした。絵をかくことが大好きで，休み時間には教室で１人で絵をかいていることが多くありました。家でもよく絵をかいていたそうです。

４月の終わりの家庭訪問のとき，母親から担任に

「５年生になったのだから，絵ばかりかいていないで，他の学習をしてほしいんです。塾にも通わせたいと思っています。」

と話がありました。担任は母親に

「Ｒさんが好きなことを応援してやることは，きっとＲさんの自信になりますよ。」

という話をしました。

その後，母親はＲさんを応援し始めてくれました。Ｒさんは担任に「お母さんと美術館に行ってきた」「図書館へ行って絵の本を借りてきた」と，うれしそうに話しました。また，色数のたくさんある色鉛筆を母親に買ってもらったと目を輝かせて担任に話しました。欲しかった色鉛筆を買ってもらい，Ｒさんは絵をかくことが，ますます好きになり，絵の技術もどんどん上達しました。

ある日，Ｒさんが休み時間に教室で絵をかいていたとき，クラスの子がそれを見てほめてくれました。Ｒさんは，その子がかいてほしいと言った犬の絵を家でかいてきてプレゼントしました。それがきっかけとなり，休み時間になると，Ｒさんと一緒に過ごす子どもが増えていきました。友だちができたＲさんは，だんだん活発になり，授業での発言が増えていきました。友だちに勧められて班長にもなりました。学習の成績もアップして，クラスの話し合いでもいい意見を出すようになりました。

Ｒさんが変わったきっかけは，Ｒさんが絵をかくことを母親が応援してくれたことです。そのおかげで，Ｒさんは絵をかくことに自信がもてるようになり，他のことへも波及していったのでした。

子どもがやりたいことや好きなことを親が応援することは，子どもの心を安定させます。親が応援してくれるので，自分が好きなことに熱中できます。すると楽しい気持ちで毎日を生活できるようになります。そんな親のことを大好きになり，親子関係はますますよくなります。また，子どもの心が安定しているので，家族や友だちや周りの人にもやさしく接することができるようになります。

好きなことに熱中でき，そのことに自信がもてると，自己肯定感が高まります。ほかのことに対しても「できる」「がんばれる」とできることが広がっていきます。また，苦手なことであっても，やってみようかなと挑戦していくようになり，苦手の克服につながることもあります。

Ｋさんの母親は子どものころ，ピアノやダンスを習いたかったのですが，親の許可をもらえずにできませんでした。母親はＫさんにはピアノとダンスを習わせたくて，ピアノとダンスの教室に通わせました。Ｋさんが一番好きなことは絵をかくことでしたが，まじめな性格のＫさんは，休むことなく，中学３年まで通い続けました。小学４年のときの母親との何気ない会話の中で「お母さんは自分がピアノとダンスをやりたかったんだ。でも自分ができなかったから，私にやらせたんだ。」と気付きました。

Ｋさんが小学５年のとき，母親は中学校への進学について「私は〇〇中学に行ったけど，本当は□□大の附属中に行きたかった。」と話し出しました。Ｋさんは母親の気持ちを察し，しばらくして「□□大の附属中学校に行きたい。」と伝えました。母親はとても喜びました。母親に勧められた学習塾にも休まず通い，もともと成績もよかったので，□□大学附属中学校に合格しました。

入学前に，母親は「私は中学のときに体操部に入ってとてもよかった。体も柔らかくなったし姿勢もよくなった。」とＫさんに話しました。それを聞いたＫさんは，お母さんは私に体操部に入ってほしいんだと思いました。実は，Ｋさんは美術部に入りたいと思っていたのですが，体操部に入ることにしました。□□大学の附属高校に進学したあとも体操部に入り，中学から高校の６年間，体操を続けました。

Ｋさんは□□大学に進学しました。母親からは，大学のサークルに関わっての話はありませんでした。そこで一番興味のあった絵本サークルに入りました。そして，他の高校からきたＳさんと出会いました。Ｓさんは明るく元気で，自分がやりたいことはどんどんやっていく人でした。興味をもった絵本作家には直接会いに行くし，好きな画家の展覧会があれば遠い地方の美術館であっても見に行きました。Ｓさんは小さいころから自分がやりたいことをどんどんやってきたとのことでした。両親はいつもそれを応援してくれたそうです。Ｋさんは自分との違いにショックを受けました。

Ｋさんは，今までの自分の生活や母親との関係について考え始めました。そんなとき，母親は就職についてロにするようになりました。「公務員っていいわよね。お給料もいいし，生活も安定してるし。」それを聞くたびに，Ｋさんはイライラしていました。大学３年のある日とうとう爆発しました。「もう，いい加減にして！ 私は私なの。私の仕事は私が決めるから！」

その３日後，１人でアパートを借りて住むことにしました。母親は反対しましたが，Ｋさんは固い決意で実行しました。お母さんから離れないと私はダメになるという思いが強かったそうです。その後，大学を卒業するまで１人で生活しました。１人で住むことで，解き放たれたような気持ちよさを味わい，同時に自由のありがたさを実感しました。就職活動では自分が興味をもった会社を訪問したり，自分の将来のことを自由に考えたりすることがとても楽しかったそうです。そして，かねてから興味のあった出版関係の仕事に就くことができました。

Ｋさんは次のように言います。

「子どものころはいつも心から楽しめない毎日で，暗い気持ちでいたように思います。ピアノは弾けるようにはなりましたが，弾きたいとは思いません。大学のときに爆発してよかったと思っています。それにしても，子どものころに絵を習いたかったなぁ。もし習っていれば絵本作家になれたかも…。私に子どもが生まれたら，最大限，子どもの意思を尊重したいと思います。自分がやりたいことをどんどんやっていける，そういう人になってほしいと思います。」

還暦間近でも誰かに応援してほしい気持ちはありますし，退職後やりたいと考えていることがあります。
我が家には貸店舗があります。空いている店舗を自力で改装して「アトリエ」兼「工作室」をつくり，
マイルームにして，そこでじっくり絵をかいたり，コツコツ物をつくったりしたいと思っています。
妻の許可をどうやってとったらいいのか作戦を練る必要がありますが，割と本気で考えています。